

元小学校の教室に大学の研究室

学校蔵で島の将来探る

東大と芝浦工大が利用

脱炭素、木材加工探究へ

佐渡市西三川の旧西三川小学校を利用した酒蔵「学校蔵」で4日、脱炭素や持続可能な地域社会について学ぶ「佐渡研究室」の開所式が開かれた。教室の一つを活用し「東京大

西三川

学未来ビジョン研究センター」と「芝浦工業大学地域共創基盤研究センター」の教授や学生らが、地域課題の解決に向け、研究の活動拠点として利用する。



開所式であいさつする東京大学未来ビジョン研究センターの福士謙介教授(右)＝4日、佐渡市西三川

学校蔵は、尾畑酒造(真野新町)が2014年から同校を借り受け、酒蔵として活用。両大学は長年、佐渡市や尾畑酒造と連携し、太陽光発電についての研究や、学生らの実習を行ってきた。

開所式には、市や両大学の関係者ら約10人が参加。未来ビジョン研究センター長の福士謙介教授は「離島の抱える課題は多い。佐渡を拠点に解決に向け研究を進めたい」と話した。地域共創基盤研究センター長の栗島英明教授は「大学、地域、企業などが交流・連携していける場所にしたい」とあいさつした。

今後、東大は佐渡での太陽光発電など、再生可能エネルギーの可能性を探るほか、農林業、交通などの地域が抱える課題について研究。芝浦工大は、研究室に設置した木材加工の最新機器の活用などを通して、島内の木材加工技術の向上を目指す。